

「ドイツ語教育ワークショップ」報告

大塚 讓

1. 主旨と背景

1995年9月22日、本学で東京ドイツ文化センター（ゲーテ・インスティトゥート）との協力の下で「ドイツ語教育ワークショップ」が開催された。テーマは《日本の大学での「テーマ」を使ったドイツ語授業の可能性》であった。ドイツ語系では、95年度から、系全体の共通の試みとして、当初から「テーマ」のみを用いる選択クラスを一つ（ドイツ語IA、大塚担当）設け、日本人教師とネイティブスピーカーの協力の下に実験的授業を始めているが、北大での日本独文学会に参加した先生方にお集まりいただき、この試みをオープンにすることでドイツ語教育についての議論の場を提供しようと考えたわけである。幸いこの提案にネイティブスピーカーを含む25名の熱心な先生方が関心を示され、学会終了後わざわざ小樽にお来しになった。22日終日の研究会だったのでこのために余計に二泊されたわけである。参加者の顔ぶれも九州から北海道まで全国にまたがり世代も20代から50代と多彩であった。もちろん使用言語はドイツ語であった。参加者全員がドイツ語教育に強い関心を持ち、また「テーマ」をすでに使用した経験があるとか今後その予定があるといった人も少なからずいたせいか、あるネイティブの言を借りれば、日本でのこの種の研究会としては例外的に活発な意見交換や議論が交わされた。

「テーマ」（正確には *Themen neu 1*, Max Hueber Verlag）とは、「外国語としてのドイツ語」の教科書として極めて高い評価を得ているもので、ドイツ語圏はもとより世界各国で使用されており、コミュニケーション能力を中心とする4技能の総合的能力の育成を目指している。全6冊から成る教科書群（教科書、ワークブック、教師用指導書A、教師用指導書B、口頭練習帳、各国語別語彙解説書、付属カセット6巻）で、この上の段階の *Themen neu 2* および *Themen neu 3* もほぼ同様の構成になっている。学習者が多種多様な練習を通じてアクティブに楽しくドイツ語を習得するように仕組まれているが、これを使う教師の側は、これら複合的な教科書群を使いこなして所期の教育効果を達成するには、かなり徹底した教材研究と経験を必要とする。日本の大学で成功したという話をあまり耳にしない。片手間の取り組みでは到底使いこなせない真の専門性を要求する教科書であるということの他に、相当の時間数を要する教科書なので複数の教師のチームワークを必要としており、学習者のよりよい言語習得を度外視して孤立して授業をすることに慣れている日本の教師にはこの点もネックになっていると思われる。本学の場合、非常勤講師としてホルツァー女史にお来しいただいていることが大いに幸いした。というのも彼女はドイツ語教育学の深い学識と教師としての多彩な経験（「外国語としてのドイツ語」教師の養成に当たった経験もある）を兼ね備えた方で、その指導によってかなり本格的な態勢で実験に取り組むことが出来たからである。その意味では、試行錯誤の途上ながら、何とか議論の糸口になりうる実践報告が出来たのではないかと思っている。

2. 内容の紹介

2.1 プログラム

研究会は次のようなプログラムの下に行われた。

プログラム

10時	挨拶および参加者の自己紹介	
10時30分	報告 1: ドイツ語 IA の年間授業計画の具体的紹介 ディスカッション	大塚 讓 (小樽商大) 司会: 伊藤 貢士 (山形大)
11時15分	休憩	
11時30分	報告 2: 外国語教育にとってコミュニケーション能力 は継子なのか? (併せてビデオによって授業を具体的に紹介) ディスカッション	ズィークリト・ホルツァー (北大) 司会: 田畑 義之 (九大)
12時30分	学生たちとの会食	
14時	報告 3: 「推測」を駆使した読解力の育成 ディスカッション	ズィークリト・ホルツァー (北大) 司会: 境 一三 (成蹊大)
15時	休憩	
15時30分	参加者からの質問とコメント	司会: 山路 朝彦 (独協大)
16時	報告 4: 「新テーマ 1」による授業における克服課題 ディスカッション	大塚 讓 (小樽商大) 司会: 山路 朝彦 (独協大)
17時	まとめ	
18時	懇親会	

2.2 個々の報告

ここで個々の報告内容について簡単に紹介しておこう。

[報告 1]

95年度ドイツ語 IA (「テーマ」を使用してる選択クラス) の授業内容について詳細な報告がなされた。すなわち、授業の目標・方法・教材・求められる参加姿勢・評価方法等に関する基本計画、教科書・ワークブック・語彙の習得・テスト等の諸課題をめぐる具体的な年間授業計画、授業担当方法・ミーティングや連絡・授業の準備・チームティーチング等の教師間のチームワークをめぐる諸問題について紹介された。

[報告 2]

日本のドイツ語教育を含めた外国語教育全般について、文法訳読法偏重の伝統に対して批判的なメスを入れ、コミュニケーション能力へのあまりの軽視を問題の遡上にのせた。限られた条件の中で将来に残るベーシックな能力とは何かをめぐる重要問題が取り上げられ、特に英語以外の外国語において見られる、内容ある十分な応用練習を伴わない過度の文法規則学習の甲斐の無さ

(無味乾燥で学習効果も低い)、逆にコミュニケーション学習を中心に据えた場合の定着の良さ等が指摘された。併せてビデオによって「テーメン」による授業の実際が紹介された。

[報告3]

参加者を実験台にして、「推測」を駆使した読解力の育成をめぐる根本的発想と具体的な方法が紹介された。まず新聞記事の写真だけから内容を推測し、次に大見出しによってその推測を確認ないし微修正し、さらに記事そのものを読んで最終的に内容を確認する、というプロセスで作業が進められた。つまり、外国語のテキストを読み解く場合に急に逐語的対応になることは不合理かつ不経済であり、むしろ母語の場合の方法を最大限に活用して大意把握から精確な理解へと進む方法が取られるべきである、という提案がなされた。

[報告4]

日本人のドイツ語教師が「新テーメン1」によって授業を行う場合にどのような課題を克服する必要があるか、について報告された。教師に求められる基本的姿勢として、形態規則に対する演繹的アプローチから帰納的アプローチへの転換(学習者自身による規則の発見への手助け)、学習者の間違いへの寛容さないしは間違いの積極的意義への明確な認識、説明を減らし学習者の作業中心の授業への転換、禁欲によってではなく楽しさによって動機付ける発想と授業態勢への転換、等が提起された。こうした方向での具体的な試みとして、「テーメン」の夥しい練習問題の構造分析に基づくより適切な使用法の提案、多くの教材資料に基づく詳細な授業手順の具体的紹介がなされた。

2.3 学生たちとの会食

参加した先生方と私のクラス(ドイツ語IA)の学生たちとの会食は、東京ドイツ文化センター(ゲーテ・インスティトゥート)の提案と経費負担の下で行われた。その主旨は、授業全体をありていに紹介する意味で学生たちの生の声もお聞かせしようというところにあったが、同時に学生たち自身も先生方との対話を通じて学習の意義を別な角度から再認識する契機になったと考えられ、これは計算外の重要な効用だったように思われる。

会食はプログラムの前半と後半の合間に喫茶部「シーグリーン」を貸り切って行われた。学生たちが先生方の前で物怖じして話し合いにならないのではないかと内心若干心配であったが、それは杞憂に終わり、程なくかなりリラックスして受け答えし始めだんだんあちこちで話しに花が咲いて行くのを見て、すっかり安心した次第である。先生方は実に熱心に学生たちに話し掛けておられた。授業の実際を教師側の説明と同時に学生たちの口を通して知りたかったのであろう。学生たちの中に私たち教師への信頼感と授業への満足感を見届けて下さったことを後の懇親会の席で伺ってこの上なく嬉しく思ったものだ。

3. 意義

研究会の後、ネイティヴのおもだった参加者から懇切な礼状を受け取ったが、いずれも今回の試みを高く評価する内容のものであった。今回の研究会の意義を客観的に考える傍証としてその一部を紹介してみる。

東京ドイツ文化センター(ゲーテ・インスティトゥート東京)のミュラー・ザイプ女史は次のような書簡を寄せられた。「95年9月22日の成功があなたの努力を一層強固なものとし、あなたを今後の仕事へと鼓舞することを切に希望します。私たちはこれまでしばしば、ゲーテ・インスティトゥートの授業の条件は日本の大学のそれとは比べものにならず、従ってもっぱらドイツ語

で書かれた教科書の導入は不可能である、という言葉を目にしなければなりませんでしたが、今や遂にあなたとホルツァー女史はその可能性を示し、それによって一個のパイオニア的業績をあげておられます！」(95年10月2日付け)。

また関西ドイツ文化センター(ゲーテ・インスティトゥート関西)のブラー女史の書簡は次のようであった。「私はもう一度書簡にてあのように立派な成功をおさめた小樽での研究会に感謝申し上げます。組織運営が完璧だったばかりではありません、教科書「ターメン」に基づくあのように説得力ある力を合わせた発表は、日本のドイツ語教師を勇気づけるものでした。それは本当にパイオニア的業績であり、またあなた方が(発表全体を[筆者補足])ひとつのプロセスに仕立て上げたが故にあのように啓発するところ大なのです。そしてあなた方はなんと多くの事前の下準備をやったのけたことでしょう! 全てに十分な論拠が与えられていました。とりわけ私がよいと思ったのは、ひとつの課の構造を一覧表の形で精確に解き明かした発表でした！」(95年10月9日付け)。

お二人とも「外国語としてのドイツ語」教育の指導的立場にある人たちであり、その彼女らが「ターメン」という手強い教科書の導入に向けての私たちの取り組みを高く評価してくれていることをこの際素直に喜びたい。

今回の研究会実現の裏話になるが、そもそもこの話は、6月末に前記ミュラー・ザイプ女史より、9月20日、21日に行われる北大での日本独文学会の前後にドイツ語教育関係のゼミナールと一緒にやらないか、という電話をもらったことに始まる。実際、私自身かねがね、日本独文学会の会員のほぼ全員がドイツ語教師を生業としていながら、せっかく全国津々浦々から会員が勢揃いする学会で、ドイツ語教育について掘り下げた議論が行われる場がほとんど無いことをまことに不正常な状態であると思っていた。日本独文学会はドイツ語教育に対して公的な責任を持っている。ましてや大学改革の嵐の中で今一番問われていることのひとつは戦後における大学での外国語教育総体のあり方をめぐらる問題である。特にドイツ語を筆頭とする英語以外の外国語はその存在意義そのものを問われかねない切羽詰まった状況にある。教育内容、教育システム、教育と研究の関係のあり方、教員養成システム、教育業績の積極的評価方法等、大学の外国語教育をめぐらる問題は山積しており、こうした問題を今こそ学会全体を挙げて議論すべきなのである。私はこうした立場に立つ人間なので、ミュラー・ザイプ女史の上記の提案に直ちに賛同し、先づ隗より始める意味で、自分自身の教育的取り組みをオープンにしそれを手掛かりに情報や意見の交換をする場を提供しようと考えた。ちょうど「ターメン」による授業に本腰を入れて取り組み始めたところでもあり、これについて報告し批評を寄せてもらえるなら、むしろその後の授業にプラスになるに違いないとも思われた。

この種の研究会は少なくともドイツ語教育の世界では先例が無いはずであるし、そもそもこうした催しそのものを手掛けるのも全く初めてのことであったが、幸い運営面についても発表内容の面についても参加者の皆さんに一応ご満足いただけたようで今は安堵している。人伝に、今回の小樽での試みがきっかけとなって次の学会でも同様の研究の場を作ろうという動きがあるとも聞くが、そのような営みが定着しむしろ学会全体のルティーンになって行くことを願っている。

もちろん問題点も無かったわけではない。特に残念だったのは、研究会当日が本学の試験期間とかち合い授業そのものを公開することができず、やむなくビデオによる部分的紹介に切り替えたことである。また学会本部や学会北海道支部をはじめとする関係諸方面の然るべき協力が得られなかったことも嘆かわしいかぎりであるが、今は敢えて何も言わない。これら全ての根底には

「ドイツ語教育ワークショップ」報告

大学における外国語教育の実態としての賤業的地位という問題が横たわっている。しかし一番問題なのは最下層の賤民がこの場合学生に他ならないということだ。大学の外国語教師が職業倫理を見据えうる良心と知性を持たない限り何事も始まらない。